

原著

## 養護教諭の研究活動の特徴と関連要因の分析

### Characteristics of *Yogo* Teachers' Research Activities and Related Factors

渡辺美恵<sup>\*1</sup>, 土田満<sup>\*2</sup>, 山田小夜子<sup>\*3</sup><sup>\*1</sup> 岐阜県関市立緑ヶ丘中学校, <sup>\*2</sup> 愛知みずほ大学, <sup>\*3</sup> 中部学院大学Mie WATANABE<sup>\*1</sup>, Mitsuru TSUCHIDA<sup>\*2</sup>, Sayoko YAMADA<sup>\*3</sup><sup>\*1</sup> Midorigaoka Junior High School in Seki, <sup>\*2</sup> Aichi Mizuho College, <sup>\*3</sup> Chubu Gakuin University

#### Abstract

This study examined the characteristics of *yogo* teachers' research activities and related factors, with the aim of clarifying the influences of such activities on work-related duties. The study was conducted within the period between August 8 and September 12, 2012, involving 124 *yogo* teachers working at public elementary and junior high schools located in A-Prefecture.

On factor analysis of *yogo* teachers' research activity scale scores, the following 3 factors were extracted: "motivation to conduct research", "environments for research activities", and "implementation of research projects".

With factor 1: "motivation to conduct research", the status of research, anticipated levels of difficulty, usefulness, pleasure, burdensomeness, verification of implementation, and self-efficacy were associated. With factor 2: "environments for research activities", the experience of presenting implemented research projects, status of research, anticipated levels of usefulness, pleasure, burdensomeness, and self-efficacy were associated. With factor 3: "implementation of research projects", the experience of presenting implemented research projects, status of research, anticipated levels of difficulty, usefulness, pleasure, burdensomeness, job satisfaction level, verification of implementation, and self-efficacy were associated.

The status of research, anticipated levels of usefulness, pleasure, burdensomeness, and self-efficacy showed significant correlations with all 3 factors. The job satisfaction level was significantly correlated only with "implementation of research projects". Attributes or interpersonal relationships in the workplace were not significantly correlated with any factor.

These results indicate the possibility of *yogo* teachers' research activities being markedly influenced by their own "motivation to conduct research". It was also suggested that *yogo* teachers showing a high level of "motivation to conduct research" perform research activities while independently creating appropriate personal and physical environments for such activities, and that this enhances their self-efficacy regarding work-related duties.

Key words : *yogo* teacher, research activity, motivation to conduct research, self-efficacy

## I はじめに

中央教育審議会答申（平成 20 年）においては、養護教諭の役割・職務について、学校保健活動の推進に当たって中核的な役割を果たしており、現代的な健康課題の解決に向けて重要な役割を担っていることや、救急処置、健康診断、疾病予防などの保健管理、保健教育、健康相談、保健室経営、組織活動などを行っていることが述べられている<sup>1)</sup>。学校教育法や学校保健安全法等の関係法規を踏まえた養護教諭の専門領域における主な職務内容として、学校保健計画及び学校安全計画、保健管理、保健教育、保健室経営、健康相談、保健組織活動があり、それらに加えて子どもの心身の健康に関わる研究を大枠として捉えている<sup>2)</sup>。後藤<sup>3)</sup>は、国立大学養護教諭養成協議会研究委員会が提示した「養護教諭に必要な能力」に関する 4 主題と、日本学校保健学会の共同研究班が「養護教諭の養成教育のあり方」をめぐって示した 5 主題からなる「養護教諭に必要な能力」、日本教育大学協会全国養護部門研究委員会が整理した 11 主題からなる「養護教諭の力量」をまとめている。これらは、役割や機能に対応させた養護教諭に求められる能力または力量を捉えたものであり、共通して「研究」が明示されている。

養護教諭の研究活動について、「養護教諭にとっての研究とは、経験から共通の理論を導きだしたり、その理論を実証したりするプロセスである」と定義されている<sup>4)</sup>。斉藤ら<sup>5)</sup>は、一般的な研究と養護教諭の研究の違いについて、現職の研究が重要な意味を持つことに加え、学校現場における実践の中からこそ生まれるものという独自性を持ち合わせているとしている。実際の研究活動の動向については、学会発表では現職の養護教諭が連名で発表者に加わっている演題が 5 割を占める等、養護教諭が研究に関わるようになってきており、その内容は、職務の特定領域に細分化・深化していることが報告されている<sup>6)</sup>。一方、研究は「活動の紹介」に終始しているものが多く、研究デザインの適切性、信頼性、妥当性についての記載がない論文が多いことが課題として指摘されている<sup>6-8)</sup>。また、著者ら<sup>9)</sup>は現職の養護教諭の研究活動の現状について調査した報告の中で、養護教諭は、研究は有益であるが難しく苦しいものであるというイメージを持っているが、研究活動に取り組むことで研究のイメージが良くなるというサイクルが生まれる可能性を示唆している。さらに、研究に取り組むことで職務への自己効力感の向上を実感しており、日々の自己実践を振り返り検証する実践検証を研究の原点として、職務上の課題や疑問への問いかけを研究課題とした実践研究に積極的に取り組むことが職務への自己効力感を高めることに繋がることも明確にしている。

看護的分野においては、菊池<sup>10)</sup>による看護師の研究活動における報告で、研究に主体的に取り組んできたベテラン看護婦ほど自律性が高く、研究意欲の高さが臨床能力の向

上に関与するなど、看護師の職務上の自律性と研究活動との関連が明らかにされている。これらのことから、養護教諭もまた看護師と同様に、研究意欲の高さが、養護実践の能力の向上に関与し、養護実践に対する自信である職務への自己効力感の向上に関係していると考えられる。

前述した背景を踏まえ、本稿では、養護教諭の行う研究活動が職務に影響を与えることを明らかにする目的で、養護教諭の研究活動の特徴と研究活動に関連する要因について検討した。

## II 研究方法

### 1. 調査対象・調査時期・調査方法

A 県内の 2 地区における 7 郡市の公立小・中学校に勤務する養護教諭 135 名を対象として、2012 年 8 月 8 日～9 月 12 日に、無記名自記式のアンケート用紙を用いて調査を行った。各郡市の養護教諭部会長を通じて調査依頼をし、夏季の養護教諭部会（研修会など）においてアンケート用紙を配布して、会の終了後に回収した。

### 2. 倫理的配慮

本調査により得た結果は「コンピュータによって統計処理および解析を行うこと、および、本調査への協力は自由意思によるものであること」を調査依頼文に明記し、質問紙の返却と同意への署名をもって協力の意志を確認した。

### 3. 調査内容

質問項目は以下のとおりである。

#### 1) 対象者の属性

勤務校種、現在の勤務校の学校規模、現在の勤務校での勤務年数、年代、これまでの勤務校種と勤務年数、養成課程の 6 項目において選択式および記述式とした。

#### 2) 研究に関する現状

養護教諭の研究に関する先行研究<sup>6)</sup>を参考に作成した。学会や研究会への所属、学会への参加経験、論文や実践の発表経験、現在の研究の状況、研究の種類、共同研究者の有無、研究で得られた効果についての 8 項目について選択式および記述式とした。

#### 3) 研究のイメージ

養護教諭の研究に関する先行研究<sup>6)</sup>を参考に作成した。研究の難易度では「易しい」「少し易しい」「少し難しい」「難しい」、有益度では「有益」「少し有益」「少し無益」「無益」、苦楽度では「楽しい」「少し楽しい」「少し苦しい」「苦しい」の 3 項目のイメージについて、それぞれ 4 件法を選択式とした。

#### 4) 養護教諭の研究活動尺度

看護専門学校教員の研究活動尺度に関する先行研究<sup>11)</sup>を参考に、「研究の実践」「研究意欲」「研究活動の環境」の要因から 15 項目を抽出・改編して作成した。すべての項目は、「非常に思う（7 点）」「思う（6 点）」「少し思う（5 点）」「ふつう（4 点）」「少し思わない（3 点）」「思わない

(2点)」「非常に思わない(1点)」の7件法の選択式とした。

#### 5) 養護教諭の自己効力感尺度

養護教諭の自己効力感に関する先行研究<sup>12-13)</sup>で作成された養護教諭の自己効力感尺度の40項目のうち、A県で使用されていない名称について一部変更して使用した。すべての項目を「非常に思う(7点)」から「非常に思わない(1点)」の7件法の選択式とした。

#### 6) 養護教諭の職務への自己効力感の関連要因

職務への自己効力感の関連要因として先行研究<sup>12-14)</sup>で報告されている、養護教諭の仕事への満足度(以下、仕事満足度と示す)、学校内の教職員間の人間関係(以下、職場の人間関係と示す)、自己の実践の振り返り検証の頻度(以下、実践検証と示す)を取り上げ、すべての項目を5件法の選択式とした。また、関連要因として報告がある勤務年数については対象者の属性、学会参加については研究に関する現状の中で回答を求めた。

### 4. 分析方法

養護教諭の研究活動尺度の質問項目については単純集計し、平均値と標準偏差を算出した。養護教諭の研究活動尺度は、主因子法バリマックス回転で因子分析を行った。養護教諭の自己効力感は、自己効力感得点平均値を低値群(～4.70)(以下、自己効力感L群と示す)・中間値群(4.71～5.37)(以下、自己効力感M群と示す)・高値群(5.38～)(以下、自己効力感H群と示す)の3分位で群分けした。養護教諭の研究活動尺度の因子分析で抽出された因子と属性等の要因との関連については、校種、学会等の所属、学会への参加経験、論文等の発表経験、実践の発表経験、

研究の状況にはt検定、あるいはMann-WhitneyのU検定を行った。学校規模、着任年数、経験年数、養成課程、研究のイメージの難易度、有益度、苦楽度、仕事満足度、職場の人間関係、実践検証、養護教諭の自己効力感は一元配置分散分析、あるいはKruskal-WallisのH検定を行った。多重比較は、Bonferroniの検定を行った。

統計解析にはIBM SPSS Statistics ver.19.0を用いた。各検定においては危険率5%以下を有意水準とした。

## Ⅲ 結果

回収数130名(回収率96.3%)であった。そのうち、「養護教諭の研究活動尺度」と「養護教諭の自己効力感尺度」の全項目に回答があった124名を分析対象とした。有効回答率は、91.9%である。

### 1. 養護教諭の研究活動尺度の得点と回答者の分布

養護教諭の研究活動尺度を構成する質問項目の得点と回答者の分布を表1に示した。1つの選択肢に50%以上の回答が集中する項目はなかった。質問項目全体の研究活動得点平均値は4.16(SD=0.60)であり、研究活動得点平均値の高い項目は「1. 養護教諭に研究活動は必要である」で5.38(SD=1.07)と大変高い得点であった。次いで「2. 研究活動は養護教諭の能力と関係がある」で4.94(SD=1.29)、「5. 今以上に研究のスキルを身につけたい」で4.74(SD=1.49)であった。逆に、低い項目は「6. 学会に積極的に参加している」で3.12(SD=1.40)、次いで「15. 研究のための時間を確保できる」で3.34(SD=1.44)、「7. 常に研究に関わっている」で3.53(SD=1.51)であった。

表1 養護教諭の研究活動尺度を構成する質問項目の得点と回答者の分布

									n=124
質問項目	m ± S D	人数 (%)							
		非常に思う	思う	少し思う	ふつう	少し思わない	思う	思わない	
1. 養護教諭に研究活動は必要である	5.38 ± 1.07	17( 13.7 )	44( 35.5 )	40( 32.3 )	15( 12.1 )	8( 6.5 )	0( 0.0 )	0( 0.0 )	
2. 研究活動は養護教諭の能力と関係がある	4.94 ± 1.29	11( 8.9 )	32( 25.8 )	41( 33.1 )	28( 22.6 )	4( 3.2 )	6( 4.8 )	2( 1.6 )	
3. 研究に関心がある	4.31 ± 1.41	6( 4.8 )	19( 15.3 )	30( 24.2 )	41( 33.1 )	12( 9.7 )	12( 9.7 )	4( 3.2 )	
4. 研究の基礎的知識がある	3.65 ± 1.28	1( 0.8 )	10( 8.1 )	17( 13.7 )	45( 36.3 )	21( 16.9 )	28( 22.6 )	2( 1.6 )	
5. 今以上に研究のスキルを身につけたい	4.74 ± 1.49	16( 12.9 )	24( 19.4 )	31( 25.0 )	32( 25.8 )	10( 8.1 )	8( 6.5 )	3( 2.4 )	
6. 学会に積極的に参加している	3.12 ± 1.40	0( 0.0 )	6( 4.8 )	13( 10.5 )	34( 27.4 )	28( 22.6 )	23( 18.5 )	20( 16.1 )	
7. 常に研究に関わっている	3.53 ± 1.51	5( 4.0 )	7( 5.6 )	16( 12.9 )	39( 31.5 )	22( 17.7 )	24( 19.4 )	11( 8.9 )	
8. 仕事の中から研究テーマを取り上げている	4.25 ± 1.38	7( 5.6 )	15( 12.1 )	29( 23.4 )	41( 33.1 )	18( 14.5 )	11( 8.9 )	3( 2.4 )	
9. 研究結果を児童生徒のケアに取り入れている	4.36 ± 1.36	7( 5.6 )	16( 12.9 )	34( 27.4 )	42( 33.9 )	12( 9.7 )	9( 7.3 )	4( 3.2 )	
10. 研究について意見交換する機会がある	4.26 ± 1.46	7( 5.6 )	20( 16.1 )	23( 18.5 )	44( 35.5 )	12( 9.7 )	14( 11.3 )	4( 3.2 )	
11. 職場には研究活動を支援する雰囲気がある	4.15 ± 1.39	8( 6.5 )	12( 9.7 )	21( 16.9 )	52( 41.9 )	15( 12.1 )	12( 9.7 )	4( 3.2 )	
12. 研究について上司の助言が得られる	4.40 ± 1.32	5( 4.0 )	20( 16.1 )	35( 28.2 )	39( 31.5 )	10( 8.1 )	14( 11.3 )	1( 0.8 )	
13. 研究を指導してくれる人がいる	4.06 ± 1.57	11( 8.9 )	13( 10.5 )	18( 14.5 )	40( 32.3 )	18( 14.5 )	20( 16.1 )	4( 3.2 )	
14. 文献・資料を入手しやすい環境である	3.89 ± 1.34	5( 4.0 )	11( 8.9 )	14( 11.3 )	53( 42.7 )	20( 16.1 )	18( 14.5 )	3( 2.4 )	
15. 研究のための時間を確保できる	3.34 ± 1.44	3( 2.4 )	7( 5.6 )	10( 8.1 )	40( 32.3 )	26( 21.0 )	25( 20.2 )	13( 10.5 )	

n=124

表 2 養護教諭の研究活動尺度の因子分析

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子：研究への意欲			
3. 研究に関心がある	0.869	0.123	0.137
5. 今以上に研究のスキルを身につけたい	0.717	0.137	0.189
4. 研究の基礎的知識がある	0.686	0.263	0.215
6. 学会に積極的に参加している	0.637	0.171	0.217
1. 養護教諭に研究活動は必要である	0.569	0.354	0.115
7. 常に研究に関わっている	0.502	0.329	0.463
第2因子：研究活動の環境			
14. 文献・資料を入手しやすい環境である	0.253	0.760	0.163
13. 研究を指導してくれる人がある	0.131	0.756	0.340
11. 職場には研究活動を支援する雰囲気がある	0.344	0.677	0.367
12. 研究について上司の助言が得られる	0.125	0.627	0.320
15. 研究のための時間を確保できる	0.294	0.612	0.186
第3因子：研究活動の実践			
9. 研究結果を見習う生徒のケアに取り入れている	0.314	0.325	0.752
10. 研究について意見交換する機会がある	0.157	0.434	0.731
8. 仕事の中から研究テーマを取り上げている	0.458	0.357	0.632
固有値	6.856	1.351	0.600
寄与率 (%)	48.970	9.648	4.289
累積寄与率 (%)	48.970	58.618	62.907
$\alpha$ 係数	0.873	0.880	0.887

因子分析：主因子法・バリマックス回転

除外 2. 研究活動は養護教諭の能力と関係がある

## 2. 養護教諭の研究活動尺度の因子分析

養護教諭の研究活動尺度を、主因子法バリマックス回転により因子分析を行った結果を表2に示した。

固有値の推移と解釈の可能性から、因子負荷量が0.50以上の14項目で構成される3因子を抽出した。各因子のCronbachの $\alpha$ 係数は、0.887～0.873と高く、累積寄与率は62.907%であった。

第1因子は「3. 研究に関心がある」「5. 今以上に研究のスキルを身につけたい」「4. 研究の基礎的知識がある」などの6項目からなり、研究に対する養護教諭自身の考えや思いなどを示していることから『研究への意欲』と命名した。第2因子は「14. 文献・資料を入手しやすい環境である」「13. 研究を指導してくれる人がある」「11. 職場には研究活動を支援する雰囲気がある」などの5項目からなり、研究に取り組むための養護教諭自身を取り巻く環境を示していることから『研究活動の環境』と命名した。第3因子は「9. 研究結果を見習う生徒のケアに取り入れている」「10. 研究について意見交換する機会がある」「8. 仕事の中から研究テーマを取り上げている」の3項目からなり、実際に研究に取り組んでいる様子を示していることから『研究活動の実践』と命名した。

## 3. 養護教諭の研究活動と関連する要因

研究活動尺度の3因子と対象者の属性、研究に関する現状、養護教諭の自己効力感等との関連について検討した結果を表3に示した。

第1因子『研究への意欲』と関連が認められたのは、研究に関する現状における研究の状況、研究のイメージにおける難易度、有益度、苦楽度、そして実践検証、養護教諭の自己効力感であった。研究の状況では、現在研究をしている者がそうでない者よりも研究活動得点平均値が有意に高かった。研究のイメージにおいては、難易度では、研究を少し難しいと思っている者が、少し易しい、難しいと思っている者より、有益度では、研究を有益と思っている者が、少し有益、少し無益と思っている者より研究活動得点平均値が有意に高かった。また、苦楽度では研究を楽しんでいる者が、少し苦しい、苦しいと思っている者より、あるいは、少し楽しいと思っている者が苦しいと思っている者より研究活動得点平均値が有意に高かった。実践検証では、いつも・時々している者があまり・まったくしていない者よりも研究活動得点平均値が高かった。養護教諭の自己効力感では、自己効力感H群が自己効力感L群よりも研究活動得点平均値が有意に高かった。

表3 養護教諭の研究活動の各因子に関連する要因

(M ± S.D.)											
項目		カテゴリー	n	研究活動全体	P値	第1因子 研究への意欲	P値	第2因子 研究活動の環境	P値	第3因子 研究活動の実態	P値
対象者の属性	校種 <sup>a)</sup>	小学校	82	4.21 ± 0.90	n.s.	4.18 ± 1.01	n.s.	3.97 ± 1.15	n.s.	4.35 ± 1.19	n.s.
		中学校	42	4.06 ± 1.05		4.02 ± 1.18		3.96 ± 1.19		4.17 ± 1.41	
	学校規模	99人以下(A)	42	4.12 ± 0.95	n.s.	4.09 ± 1.02	n.s.	4.00 ± 1.22	n.s.	4.10 ± 1.35	n.s.
		100人以上399人以下(B)	54	3.99 ± 0.89		3.94 ± 1.02		3.75 ± 1.07		4.20 ± 1.23	
		400人以上(C)	21	4.53 ± 1.00		4.53 ± 1.16		4.32 ± 1.18		4.74 ± 1.13	
	着任年数	1年目	32	4.07 ± 1.14	n.s.	4.05 ± 1.22	n.s.	3.92 ± 1.32	n.s.	4.25 ± 1.51	n.s.
		2年目	32	4.10 ± 0.89		4.02 ± 0.97		3.91 ± 1.18		4.17 ± 1.30	
		3年目	20	4.39 ± 0.79		4.35 ± 0.92		4.25 ± 0.89		4.52 ± 1.13	
		4年目	24	4.22 ± 0.98		4.34 ± 1.11		3.87 ± 1.28		4.36 ± 1.20	
		5年目以上	16	4.07 ± 0.85		3.87 ± 1.07		3.95 ± 1.00		4.23 ± 1.00	
研究に関する現状	経験年数	9年以下	18	4.22 ± 0.94	n.s.	4.19 ± 0.91	n.s.	4.18 ± 1.18	n.s.	4.20 ± 1.47	n.s.
		10年以上19年以下	18	4.33 ± 1.09		4.32 ± 1.33		4.21 ± 1.33		4.30 ± 1.41	
		20年以上29年以下	46	3.98 ± 1.01		3.97 ± 1.10		3.56 ± 1.22		4.22 ± 1.38	
		30年以上	42	4.25 ± 0.82		4.18 ± 0.98		4.11 ± 0.96		4.41 ± 0.98	
	養成機関	保健師養成学校・その他	4	4.23 ± 0.80	n.s.	4.46 ± 0.42	n.s.	3.55 ± 0.94	n.s.	4.67 ± 0.94	n.s.
		短期大学	103	4.17 ± 0.98		4.09 ± 1.10		4.00 ± 1.28		4.31 ± 1.28	
		4年制大学	17	4.08 ± 0.83		4.24 ± 0.98		3.85 ± 1.27		4.06 ± 1.27	
	学会等の所属 <sup>a)</sup>	あり	15	4.65 ± 1.20	*	4.80 ± 1.49	n.s.	4.36 ± 1.47	n.s.	4.84 ± 1.30	n.s.
		なし	109	4.09 ± 0.90		4.03 ± 0.97		3.91 ± 1.11		4.21 ± 1.25	
		学会への参加経験 <sup>a)</sup>	あり	36	4.19 ± 0.88	n.s.	4.31 ± 1.16	n.s.	4.00 ± 1.24	n.s.	4.22 ± 1.20
		なし	88	4.14 ± 0.93		4.05 ± 1.03		3.88 ± 0.96		4.32 ± 1.30	
	論文等の発表経験 <sup>a)</sup>	あり	5	4.41 ± 0.85	n.s.	4.87 ± 1.29	n.s.	4.32 ± 1.37	n.s.	3.93 ± 0.93	n.s.
		なし	119	4.15 ± 0.96		4.09 ± 1.05		3.95 ± 1.16		4.31 ± 1.28	
	実践の発表経験 <sup>a)</sup>	あり	89	4.26 ± 0.94	n.s.	4.18 ± 1.07	n.s.	4.10 ± 1.16	*	4.48 ± 1.26	**
		なし	35	3.91 ± 0.95		3.98 ± 1.07		3.62 ± 1.10		3.82 ± 1.16	
	研究の状況 <sup>a)</sup>	している	62	4.45 ± 0.93	**	4.38 ± 1.04	**	4.27 ± 1.19	**	4.73 ± 1.22	**
		していない	62	3.88 ± 0.88		3.88 ± 1.04		3.66 ± 1.06		3.85 ± 1.16	
研究のイメージ	難易度	易しい (A)	8	3.95 ± 0.87	**	4.04 ± 1.34	**	3.88 ± 1.01	n.s.	3.79 ± 0.85	*
		少し易しい (B)	14	4.03 ± 0.71		3.75 ± 1.01		4.19 ± 0.88		4.19 ± 0.97	
		少し難しい (C)	56	4.51 ± 0.95		4.82 ± 0.91		4.21 ± 1.25		4.63 ± 1.28	
		難しい (D)	44	3.79 ± 0.91		3.83 ± 0.95		3.81 ± 1.10		3.96 ± 1.32	
		【多重比較】		C>D		C>B, C>D				C>D	
	有益度	有益 (A)	43	4.65 ± 0.86	**	4.67 ± 0.98	**	4.36 ± 1.13	**	4.92 ± 1.12	**
		少し有益 (B)	61	4.01 ± 0.84		3.95 ± 0.96		3.92 ± 1.07		3.98 ± 1.18	
		少し無益 (C)	16	3.44 ± 1.07		3.38 ± 1.09		3.15 ± 1.30		3.63 ± 1.34	
		無益 (D)	2	3.83 ± 0.28		3.50 ± 0.24		3.80 ± 0.28		5.00 ± 1.41	
		【多重比較】		A>B, C		A>B, C		A>C		A>B, C	
	苦楽度	楽しい (A)	7	5.34 ± 1.33	**	5.24 ± 1.37	**	5.37 ± 1.48	*	5.71 ± 1.70	*
		少し楽しい (B)	25	4.42 ± 0.82		4.51 ± 1.14		4.14 ± 0.92		4.51 ± 1.06	
		少し苦しい (C)	55	4.13 ± 0.87		4.06 ± 0.87		3.98 ± 1.14		4.24 ± 1.24	
		苦しい (D)	35	3.79 ± 0.88		3.71 ± 1.02		3.55 ± 1.09		3.91 ± 1.19	
	【多重比較】		A>C, D, B>D		A>C, D, B>D		A>C, D		A>C, D		
	仕事満足度	満足・やや満足 (A)	101	4.22 ± 1.00	n.s.	4.19 ± 1.10	n.s.	4.02 ± 1.20	n.s.	4.41 ± 1.28	*
		どちらでもない (B)	19	3.88 ± 0.66		3.83 ± 0.82		3.76 ± 0.97		3.84 ± 1.01	
		不満・やや不満 (C)	4	3.80 ± 0.40		3.92 ± 1.27		3.65 ± 0.91		1.01 ± 1.25	
	【多重比較】									A>B>C	
	職場の人間関係	うまく・ややうまくいっている (A)	117	4.19 ± 0.95	n.s.	4.13 ± 1.06	n.s.	4.01 ± 1.16	n.s.	4.34 ± 1.26	
		どちらでもない (B)	5	3.83 ± 0.88		4.07 ± 1.27		3.52 ± 0.70		3.80 ± 1.10	
		うまく・ややうまくいっていない (C)	2	3.27 ± 1.23		4.08 ± 2.00		2.30 ± 0.42		2.87 ± 0.94	
	実践検証	いつも・時々 (A)	75	4.36 ± 0.94	**	4.34 ± 1.05	**	4.12 ± 1.15	n.s.	4.58 ± 1.29	**
		どちらでもない (B)	30	3.94 ± 0.99		3.96 ± 1.11		3.48 ± 1.25		3.92 ± 1.13	
		あまり・まったく (C)	19	3.70 ± 0.71		3.51 ± 0.71		3.66 ± 0.99		3.72 ± 1.08	
	【多重比較】			A>C		A>C				A>B, C	
	養護教諭の自己効力感	H群 (5.38~)	42	4.69 ± 0.89	**	4.61 ± 1.01	**	4.47 ± 1.19	**	4.98 ± 1.11	**
		M群 (4.71~5.37)	42	4.18 ± 0.81		4.13 ± 0.92		3.91 ± 1.10		4.44 ± 0.95	
		L群 (〜4.70)	40	3.80 ± 0.84		3.80 ± 1.06		3.49 ± 1.00		3.42 ± 1.22	
	【多重比較】			H群>M群>L群		H群>L群		H群>L群		H群, M群>L群	
a) は t 検定またはMann-WhitneyのU検定 無印は分散分析とKruskal WallisのH検定 **P<0.01,*P<0.05,n.s.:not significant											

a) は t 検定または Mann-Whitney の U 検定  
無印は分散分析と Kruskal-Wallis の H 検定

\*\*P<0.01,\*P<0.05,n.s.:not significant

第2因子『研究活動の環境』と関連が認められたのは、研究に関する現状における実践の発表経験、研究の状況、研究のイメージにおける有益度と苦楽度、養護教諭の自己効力感であった。研究に関する現状においては、実践の発表経験のある者がいない者より、現在研究をしている者がそうでない者よりも研究活動得点平均値が有意に高かった。研究のイメージにおいては、有益度で研究を有益と思っている者が少し無益と思っている者より、苦楽度で研究を楽しんでいる者が少し苦しい、苦しいと思っている者よりも研究活動得点が高かった。養護教諭の自己効力感では、自己効力感H群が自己効力感L群よりも研究活動得点平均値が有意に高かった。

第3因子『研究活動の実践』と関連が認められたのは、研究に関する現状における実践の発表経験、研究の状況、

研究のイメージにおける難易度、有益度、苦楽度、仕事満足度、実践検証、養護教諭の自己効力感であった。研究に関する現状においては、実践の発表経験で、発表経験のある者がそうでない者より、研究の状況では現在研究をしている者がそうでない者よりも研究活動得点平均値が有意に高かった。研究のイメージでは、難易度で、研究を少し難しいと思っている者が、難しいと思っている者より、有益度では、研究を有益と思っている者が、少し有益、少し無益と思っている者より、また、苦楽度では、研究を楽しんでいる者が、少し苦しい、苦しいと思っている者より研究活動得点平均値が有意に高かった。仕事満足度では、満足・やや満足の者が不満・やや不満の者、あるいは満足・やや満足の者とどちらでもない者が不満・やや不満の者よりも研究活動得点平均値が有意に高かった。実践検

証では、いつも・時々している者がそうでない者よりも研究活動得点平均値が高かった。養護教諭の自己効力感では、自己効力感H群と自己効力感M群が自己効力感L群よりも研究活動得点平均値が有意に高かった。

3 因子のすべてに有意な関連が認められた項目は、研究に関する現状における研究の状況、研究のイメージにおける有益度と苦楽度、養護教諭の自己効力感であった。研究のイメージにおける難易度と実践検証は、『研究活動の環境』と有意な関連が認められなかった。また、仕事満足度では、『研究活動の実践』のみと有意な関連が認められた。対象者の属性、職場の人間関係においては、すべての因子で有意な関連は認められなかった。

## IV 考察

### 1. 養護教諭の研究活動の特徴

新井<sup>15)</sup>は「養護教諭による実践研究の展望」の中で、実践研究を進めることは養護教諭自らの力量を高めることと、成果を養護教諭同士で共有し、広く子どもの健やかな発育発達に貢献することにつながると述べている。本調査における養護教諭の研究活動尺度を構成する質問項目で、「養護教諭に研究活動は必要である」「研究活動は養護教諭の能力と関係がある」「今以上に研究のスキルを身につけたい」の得点が特に高かった。また、養護教諭の研究活動と関連する要因では、養護教諭の研究活動から抽出された3因子と自己効力感が有意に関連し、自己効力感が高いH群が、M群、L群より研究活動得点平均値が有意に高かった。これらのことにより、養護教諭は、研究に取り組むことは自身の養護実践の能力の向上につながる活動であると捉えており、研究に取り組みたいという思いをもっていることが推察される。

養護教諭の研究活動尺度の因子分析から、『研究への意欲』『研究活動の環境』『研究活動の実践』の3因子が抽出された。齊藤ら<sup>16)</sup>の看護専門学校教員の研究活動で抽出された因子と同様であったが、第1因子が「研究の実践」で寄与率が26.126%、第2因子が「研究意欲」で16.563%、第3因子が「研究活動の環境」で13.533%と、各因子の寄与率において本調査結果との相違が認められた。本調査で抽出された第1因子である『研究への意欲』は、養護教諭自身の研究に対する意識や積極性を示す項目で構成されている。『研究への意欲』を高くもつことは、『研究活動の実践』へとつながるものと考えられる。養護教諭は研究に対し、「有益」と感じながらも「難しい」「苦しい」というイメージをもっている<sup>69)</sup>ことから、「研究に取り組もう」という思いや意欲が低いと、研究発表等の機会があったとしても積極的に研究に関わることは少ないであろう。また、第1因子の寄与率が48.970%と高かったことから、養護教諭の研究活動には養護教諭自身の『研究への意欲』が大きく影響している可能性が示唆される。

### 2. 養護教諭の研究活動と関連する要因

齊藤ら<sup>16)</sup>は、看護専門学校教員の研究意欲の高さは、日ごろの教育への疑問や関心の高さに影響されると報告している。また菊池<sup>10)</sup>は、看護師の研究活動における調査で、研究に主体的に取り組んできたベテラン看護婦ほど自律性が高く、研究意欲の高さが臨床能力の向上に関与していることを明らかにしている。養護教諭においては中安<sup>16)</sup>が、「養護教諭の実践の特質と研究が求められる理由」として、実践の成果は子どもと養護教諭の関係性によって変化するため、子どもの気づきを深めるために養護教諭の学びと成長が求められていることや、子ども観、健康観、教育観など養護教諭の力量により実践の質が影響されると述べている。著者ら<sup>9)</sup>は、養護教諭が研究活動に取り組むことで研究のイメージが良くなる可能性が示唆されるとともに、研究に取り組んだことで職務への自己効力感の向上を実感していることを報告した。本調査においては、現在研究に取り組んでいる、研究のイメージの難易度で少し難しい、有益度で有益である、苦楽度で楽しいあるいは少し楽しい、実践検証をいつも・時々している、養護教諭の自己効力感の高い者で、『研究への意欲』が高いことが認められた。この結果は、実践検証を行い、研究に取り組み、研究のイメージを向上させている養護教諭は、『研究への意欲』が高く、自己効力感も高いという前述した報告と一致している。

第2因子の『研究活動の環境』は、資料の入手や職場の研究活動を支援する雰囲気、指導者の有無、時間の確保等、実際の研究活動に取り組むにあたっての支援を含む人的・物的環境を示す項目で構成されている。また第3因子である『研究活動の実践』は、日々の自己実践を振り返り検証する実践検証から捉えた職務上の課題や疑問への問いかけを、実践研究として取り組むこと<sup>9)</sup>でもある。後藤<sup>17)</sup>は養護教諭が専門職という立場であり続けるためには、養護教諭だからこその実践を理論化し、EBP(Evidence Based Practice)を明らかにすることが求められていると提唱していることから、養護実践の根拠を明らかにするこのプロセスこそが、養護教諭の研究であると考えられる。中村ら<sup>9)</sup>は、研究に関する実態調査において研究を行うための条件整備として、指導者がいない、費用がない等を挙げ、十分でないと回答したものが多く、すべての条件がそろわないと研究できないのではなく、限られた中でできるところから始めていくのが現状であると報告している。本調査においては、実践の発表経験のある者、現在研究を行っている者、研究のイメージの有益度で有益である、苦楽度で楽しい、養護教諭の自己効力感が高い者が『研究活動の環境』が整っていることと関連していることが認められた。また、実践の発表経験のある者、現在研究を行っている者、研究のイメージの難易度で少し難しい、有益度で有益、苦楽度で楽しい、仕事満足度

の満足・やや満足の者、実践検証でいつも・時々している者、養護教諭の自己効力感が高い・中間の者が『研究活動の実践』をしていることとの関連が認められた。実践の発表経験があるということは、現在までに研究に取り組んでいたことがあると捉えることができる。新井<sup>15)</sup>は、研究に取り組むには、問題意識を持って自分で考えたり、研究のために自分で動いて情報を集めたりすることが大切であると述べている。加えて、より積極的に研究に取り組むためには、「どのように研究するか」という方法論、つまり研究を遂行する上で必要な理論的な手法や実験の手技などを、研究を通して習得するというようなやり方を推奨している。これらのことから、まずは研究に取り組むことが重要であり、『研究活動の実践』を通して『研究活動の環境』が整っていくと考えられる。

研究の状況と養護教諭の自己効力感において、『研究への意欲』『研究活動の環境』『研究活動の実践』のすべての因子と有意な関連が認められた。新井<sup>15)</sup>は、性教育と性意識の関連を検証する機会を得た養護教諭の例をもとに、実践研究により自分の思いに根拠があることを示せたことは、養護教諭自身の自信を高めるとともに周囲の人たちへの説得力を持つことにつながり、より良い性教育の契機となったことを紹介している。この養護教諭自身の自信こそ、まさに職務への自己効力感であると考えられる。

これらのことから、『研究への意欲』の高い養護教諭は、研究に対する人的・物的環境を自ら整えながら研究活動を実践しており、研究活動に取り組むことで職務への自己効力感を向上させていることが明らかになった。また、看護師と同様に養護教諭も、研究に主体的に取り組む『研究への意欲』の高さが、養護教諭の力量の向上に関与する可能性も示唆される。

本調査における研究のイメージにおいて、少し易しいイメージをもっている者が、少し難しいイメージをもつ者より『研究への意欲』が低いという結果は、質問の選択カテゴリーが細かく、対象者のデータ数の偏り等によることが要因として考えられる。今後、カテゴリー分けの方法などを含めて再検討が必要である。また、実践検証が研究活動の原点となりうる<sup>9)</sup>ことから、実践検証をどのように研究につなげていくことが、養護教諭の『研究への意欲』を高めることになるのか、具体的な方法について着目した研究が必要とされる。

## V まとめ

養護教諭の行う研究活動が職務に影響を与えることを明らかにする目的で、養護教諭の研究活動の特徴と研究活動に関連する要因について検討した。対象はA県内の公立小・中学校に勤務する養護教諭 124 名、調査期間は 2012 年 8 月 8 日から 9 月 12 日である。以下のような結果が得られた。

1. 養護教諭の研究活動尺度を因子分析し、『研究への意欲』、『研究活動の環境』、『研究活動の実践』の 3 因子が抽出された。
2. 第 1 因子『研究への意欲』と関連しているのは、研究の状況、研究のイメージの難易度、有益度、苦楽度、実践検証、養護教諭の自己効力感であった。第 2 因子『研究活動の環境』と関連しているのは、実践の発表経験、研究の状況、研究のイメージの有益度、苦楽度、養護教諭の自己効力感であった。第 3 因子『研究活動の実践』と関連しているのは、実践の発表経験、研究の状況、研究のイメージの難易度、有益度、苦楽度、仕事満足度、実践検証、養護教諭の自己効力感であった。
3. 3 因子すべてに有意な関連が認められた項目は、研究の状況、研究のイメージの有益度、苦楽度、養護教諭の自己効力感であった。仕事満足度については、『研究活動の実践』のみで有意な関連が認められた。属性、職場の人間関係ではどの因子においても有意な関連は認められなかった。

以上のことから、養護教諭の研究活動には養護教諭自身の『研究への意欲』が大きく影響する可能性が明らかにされた。また、『研究への意欲』の高い養護教諭は、研究に対する人的・物的環境を自ら整えながら研究活動を実践しており、職務への自己効力感を向上させていることも示唆された。

## VI 引用文献

- 1) 中央教育審議会：子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について（答申）平成 20 年 1 月 17 日
- 2) 保健室経営検討委員会：保健室経営計画作成の手引、（財）日本学校保健会、6-9、2009
- 3) 後藤ひとみ：養護教諭の専門性をふまえた養護教諭養成のあり方と将来への展望（特集 これからの養護教諭の資質と役割）、日本養護教諭教育学会誌、Vol.11, No.1, 10-15、2008
- 4) 後藤ひとみ・天野敦子・有村信子・石田妙美・石原昌江・大原榮子・岡田加奈子・林せつ子・三木とみ子・馬信：養護教諭の研究能力に関する研究 第 3 報 研究能力の構造と育成、日本養護教諭教育学会誌、Vol.3, No.1, 33-46、2000
- 5) 斉藤ふくみ・堀内久美子：養護教諭に関する学会発表演題の動向—日本学校保健学会および日本養護教諭教育学会の分析から—、熊本大学教育学部紀要、人文科学、第 53 号、123-131、2004
- 6) 中村朋子・藤井寿美子・外山恵子・浅野純美・門田美千代・河内信子・神戸美絵子・竹崎登喜江・西尾ミツ・松嶋紀子・村木久美恵：養護教諭の研究能力に関する研究 第 1 報 研究に関する実態調査、日本養護教諭教育

- 学会誌, Vol.3, No.1, 9-20, 2000
- 7) 山崎隆恵・小林冽子・小林央美・斉藤ふくみ・徳山美智子・中川勝子・後藤ひとみ：養護教諭の研究能力に関する研究 第2報 「研究発表」の分析から，日本養護教諭教育学会誌, Vol.3, No.1, 21-32, 2000
  - 8) 中村恵子・石崎トモイ・伊豆麻子・栗林祐子・大森悦子・西山悦子：養護教諭による質的研究における「研究の質」の分析，新潟青陵学会誌, 第1巻1号, 31-39, 2009
  - 9) 渡辺美恵・山田小夜子・土田満：養護教諭の研究活動と職務への自己効力感との関連—研究活動の現状についての調査結果の分析—，東海学校保健研究, 38(1), 45-56, 2014
  - 10) 菊池昭恵：看護専門職における自律性と研究活動との関連，Quality Nursing, 6, (4), 321-327, 2000
  - 11) 齊藤茂子・天野雅美：看護専門学校教員の研究活動尺度の開発，看護教育研究学会誌, 1巻2号, 3-14, 2009
  - 12) 鈴木薫・鎌田雅史・淵上克義：養護教諭の自己効力感の形成に及ぼす学校組織特性の影響（第Ⅰ報）—学校組織における養護教諭の自己効力感の認知構造—，日本養護教諭教育学会誌, Vol.13, No.1, 17-26, 2010
  - 13) 鈴木薫・淵上克義・鎌田雅史：養護教諭の自己効力感の形成に及ぼす学校組織特性の影響（第Ⅱ報）—管理職，学校組織風土と養護教諭の自己効力感の関係—，日本養護教諭教育学会誌, Vol.13, No.1, 27-36, 2010
  - 14) 豊島幸子・吉田亨：養護教諭の職務への自己効力感の要因—自己効力感尺度（試案）を用いて—，日本養護教諭教育学会誌, Vol.12, No.1, 77-86, 2009
  - 15) 新井猛浩：養護教諭による実践研究の展望（特集 養護教諭による実践研究の可能性），日本養護教諭教育学会誌, Vol.10, No.1, 1-4, 2007
  - 16) 中安紀美子：第8章 養護教諭と研究，大谷尚子・中桐佐智子ら編著：新養護学概論，P187-199，東山書房，2009
  - 17) 後藤ひとみ：養護教諭の実践を支える学問と養護教育学，第14回日本養護教諭教育学会，学会長基調講演，2006